学図	小国106

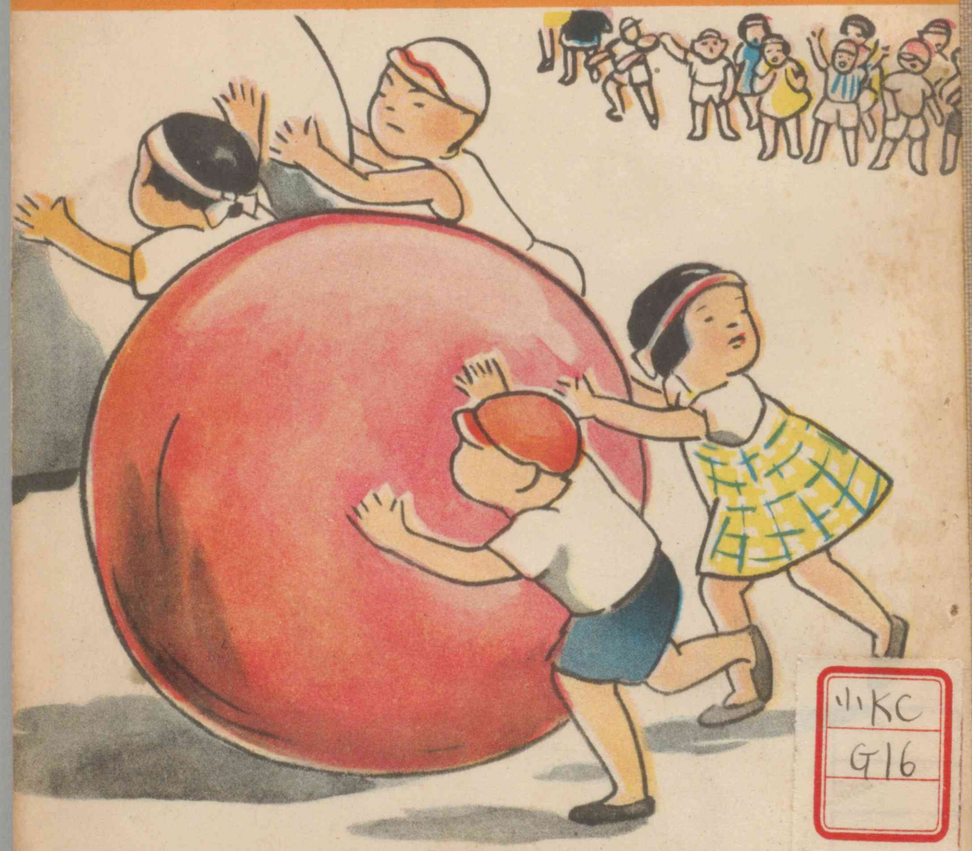
文部省検定済教科書

財団法人 教育図書研究会編修

教科書文庫
6
810
34-1949
0130449764

一ねんせいの こくご

中



小KC
G16

学校図書株式会社発行

60309
教科書文庫
6
810
34-19-49
013049764

寄贈

教科書文庫
6
810
34-1949
0130449764

昭和二十四年十月十日文部省検定済小学校国語科用

一ねんせいの こくご 中

あきらさんの ともだち

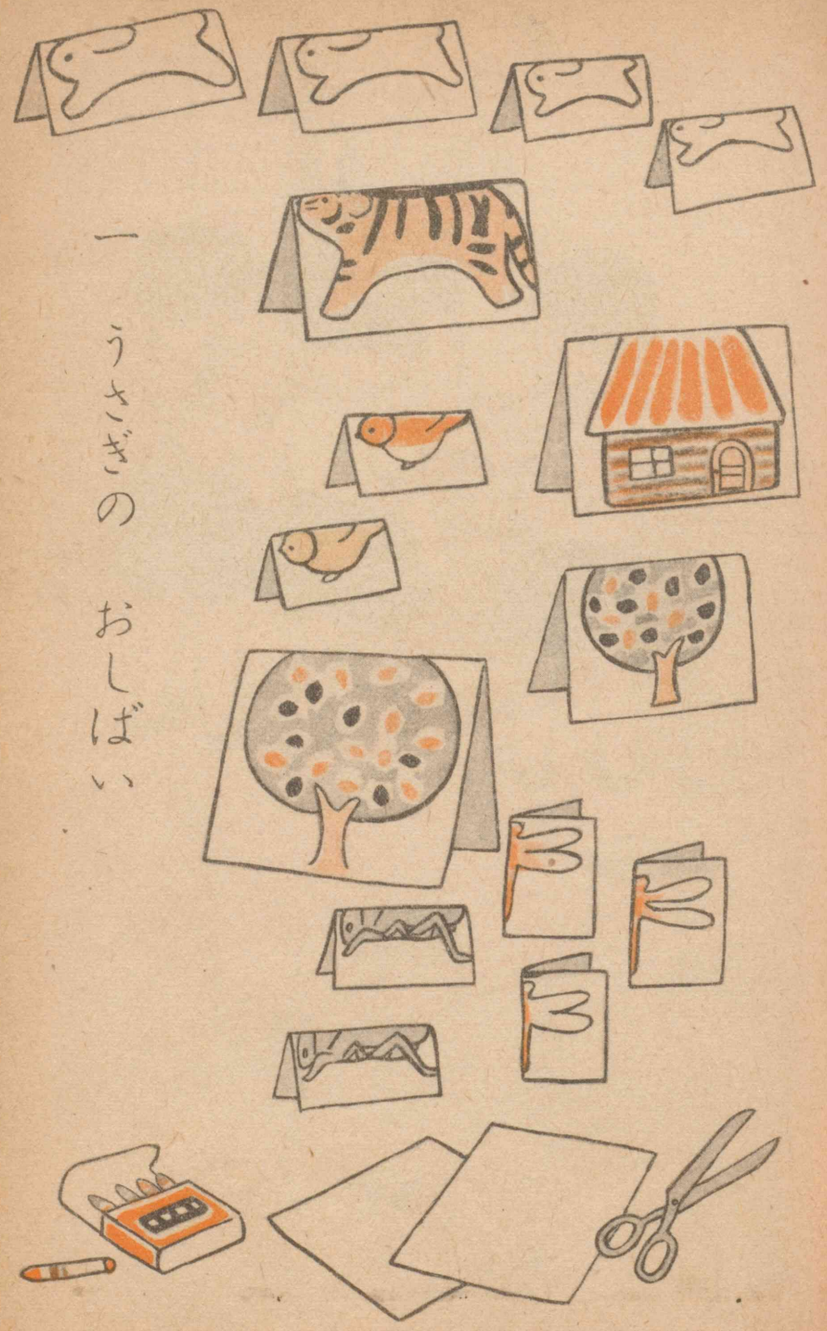
広島大学図書
0130449764

学校図書株式会社

廣島大学
教育學部圖書

中央図書館

広島大学図書
0130449764



一　うさぎの　おしばい

もくろく

一　うさぎの　おしばい……三
二　えんそく……十七
三　のりもの……三十一
　　おおきな　まちへ……三十二
　　のりものごっこ……四十三
四　あきらさんの　おはなし……四十七
　　あたらしく　でた　ことば……六十二
　　せんせいがたへ……六十四

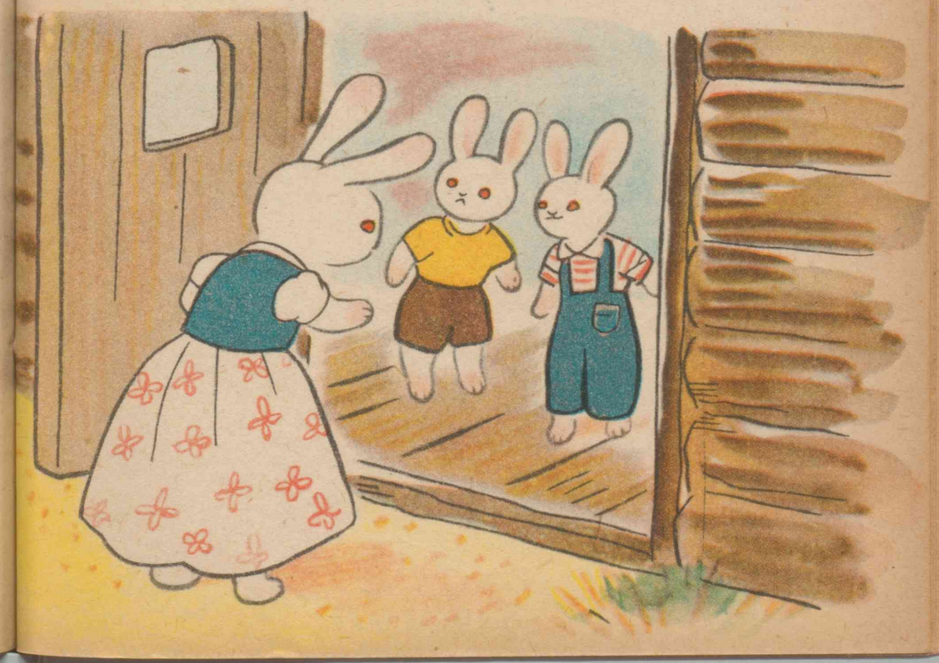
「あきらさん。」
「はあい。」
「あそびましょう。」
「あそびましょう。」
すすむさんと、ゆりこさんと、きぬこさんが　あそびにきました。

すずしい　かぜが　ふいてきました。きぬこさんは
「すずしいねえ。」
と　いいました。ゆりこさんも
「すずしいねえ。」
と　いいました。すすむさんは
「かぜが　すずしいよ。」
と　いいました。ぼうやは
「ああ　つづちい。」
と　いいました。

すずしい　おへやで　あそぶ
ことに　しました。にんぎょう
しばいを　して　あそぶ　こと
に　しました。
くれよんで　うさぎの　えを
かきました。とらの　えも　か
きました。
うさぎの　えを　きりぬきま
した。とらの　えも　きりぬき
ました。

はさみで　いろいろの　えを
きりぬきました。
おとうさんも　おかあさんも
てつだって　くださいました。
ふみこさんも　ぼうやも　て
つだいました。
にんぎょうしばいを　して
あそぶ　ことに　しました。

「とおくへ いっては いけ
ませんよ。おうちの きん
じょで あそびなさい。」
と、うさぎの おかあさんが
いいました。
「はい、とおくへは いきま
せん。おうちの きんじょ
で あそびます。」
と、こどもの うさぎたちは
こたえました。



うさぎの こどもたちは ひろ
い のはらに でました。
「あかい はなが いっぱい さ
いて いるよ。」
「あっ、とんぼだ。」
「とんぼが あんなに とおくま
で とんで いくよ。」
「それ、おいかけろ、おいかけろ。
とんぼを おいかけろ。」

「おうちが　みえなく　なったよ。」
「こまったね。おやまへ　きて　しまった。」
「こまったね。」

おおきな　とらが　でて　きました。
「こら、うさぎたち。ぼくは　とらだ。にげては　いけないよ。たべて　やるぞ。」
と、とらが　いいました。

こうさぎたちは　びっくりしました。
あかい　めが　もっと　あかく　なりました。
あかい　ことりが　いいました。
「にげろ、にげろ。はやく、にげろ。きいろい　ことりも　いいました。
「にげろ、にげろ。はやく、にげろ。どんどん　にげろ。」

こうさぎたちは　にげました。
どんどん　にげました。
とらは　おいかけました。
どんどん　おいかけました。

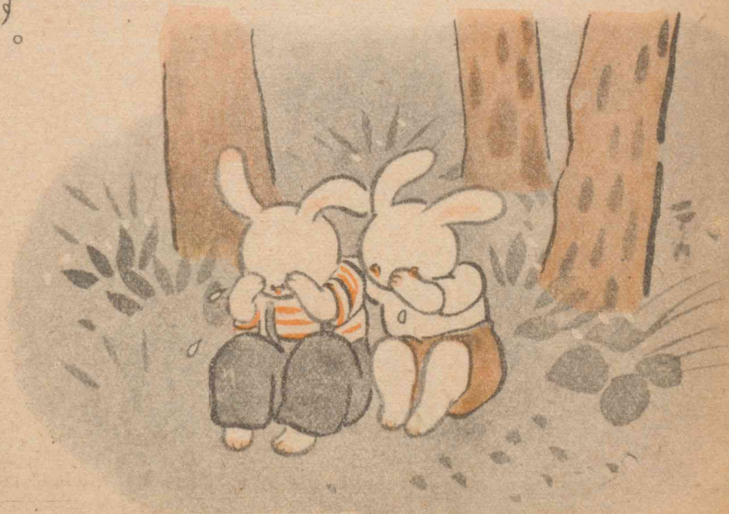
こうさぎたちは　やまの　うえへ　にげました。
とらは　やまの　うえへ　おいかけました。
こうさぎたちは　やまの　したへ　にげました。
とらは　やまの　したへ　おいかけました。

やまの　したには　かわが　ありました。
おおきな　かわが　ありました。
こうさぎたちは　はしを　わたりました。
はしは　ゆらゆらと　ゆれました。

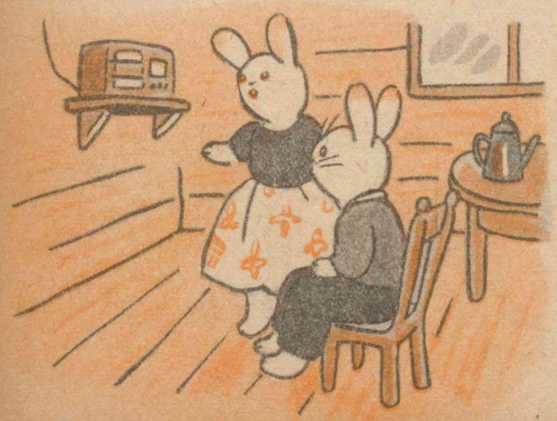
とらは　おいかけて　きました。
とらは　わたれません。
はしが　ちいさくて　わたれません。
とらは　かわへ　おちて　しまいました。

「くらく　なって　しまったね。」
「こまったね。くらくて　おうち
に　かえれないね。」
と、こうさぎたちは　いいました。

「ころころ　ころころ。」
「ちろりん　ちろりん。」
「りん　りん　りいりん。」
むしが　うたを　うたって　います。
こうさぎたちは　あかい　めを　して　なきました。

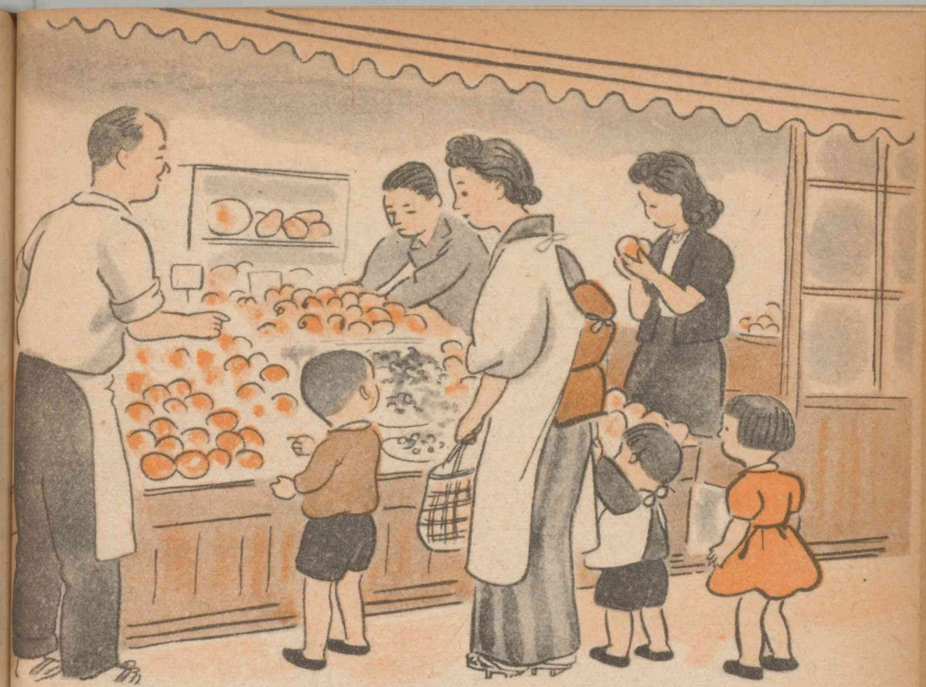


そのとき、らじおが　きこえて　きました。
「まいごの　まいごの　うさぎさん。
くらくて　うちに　かえれません。
うちが　とおくて　かえれません。
くらくて、
とおくて、
かえれません。
おとうさん、
おかあさん、
きて　ください。」



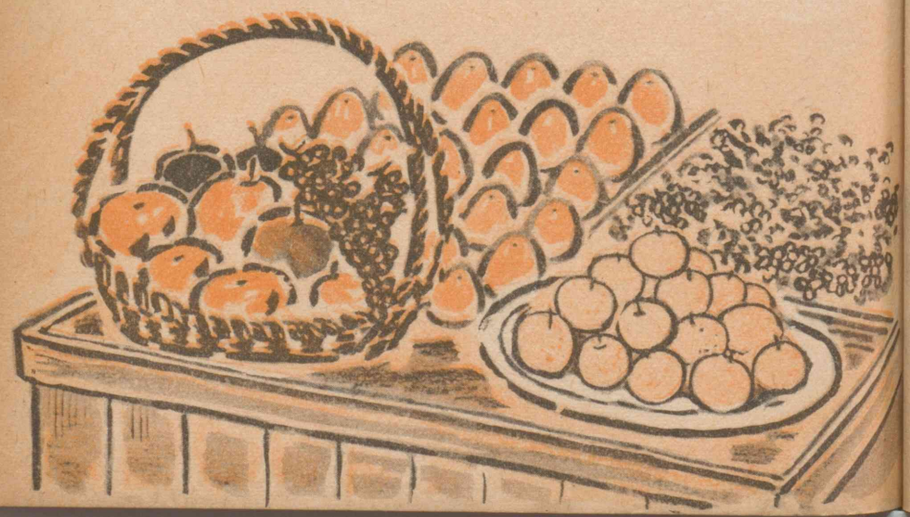
おとうさんは　らじおの
うたを　ききました。
おかあさんも　らじおの
うたを　ききました。
「はやく　たすけに　いきましょう。」
「はやく　こどもを、たすけに　いきましょう。」
おとうさんと　おかあさんは　こども
の　うさぎを　むかえに　いきました。
あかるい　つきが　でて　いました。

二　えんそく



あきらさんは　おかあさんと
えんそくの　くだものを　かい
に　いきました。
ふみこさんも　ぼうやも　い
っしょに　いきました。
「おかあさん。ぼくにも　えん
そくの　くだもの　かってね。」
と、ぼうやは　いいました。
くだものが　いっぱい　なら
べて　あります。

あかい　くだものも　あります。
あおい　くだものも　あります。
きいろい　くだものも　あります。
「きれいだね。ぼくは　りんごが
すきだ。りんごを　かって　ちょ
うだい。」
と、あきらさんが　いいました。
「ぼく　みんな　すきだ。
みんな　かって　ちょうだい。」
と、ぼうやは　いいました。

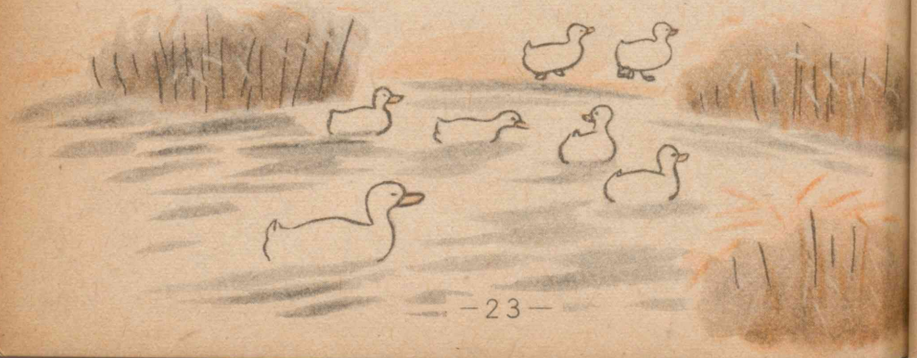


ぼうやは　あかい　りんごを　お
として　しまいました。
りんごは　ころがって　いきます。
ころころ　ころがって　いきます。
しろが　おいかけました。
あきらさんも　おいかけました。
しろが　おさえようと　しました。
りんごは　また　ころころ　ころ
がって　いきます。
しろは　また　おいかけました。

あかい　りんごが　ころころ
ころがって　きます。
しろが　また　おさえようと　しました。
りんごは　また　ころころ　ころがって
いきます。
あきらさんは　したで　まって　います。
ころがって　くるのを　まって　います。
しろが　また　おさえようと　しました。
あきらさんは　したで　まって　います。
とうとう　あきらさんが　おさえました。

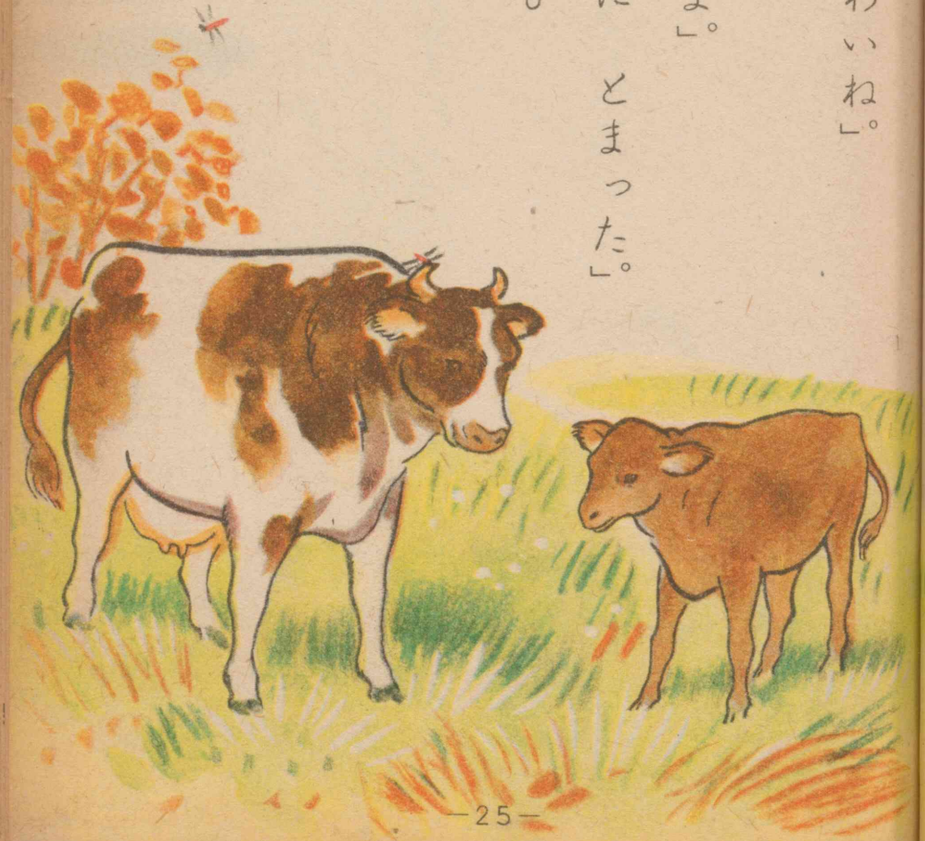
「とおく　なるもの　なあに。」
と、あきらさんが　ききました。
「がっこうが　とおく　なる。」
「まちも　とおく　なる。」
と、みんなが　こたえました。
「ちかく　なるもの　なあに。」
と、ゆりこさんが　ききました。
「やまが　ちかく　なる。」
「むらも　ちかく　なる。」
と、みんなが　こたえました。

「あひるが　およいで　いるよ。」
「おおきい　あひるは　せんせいのようだね。」
「ちいさい　あひるは　ついて　いくよ。」
「およぐの　はやいね。」
「はやい、はやい。」
「あっ、あがって　きた。」
「があがあ　があがあ　ないて　いるよ。」
「あひるの　なきかた　おかしいね。」
「あひるの　あるきかたも　おかしいよ。」



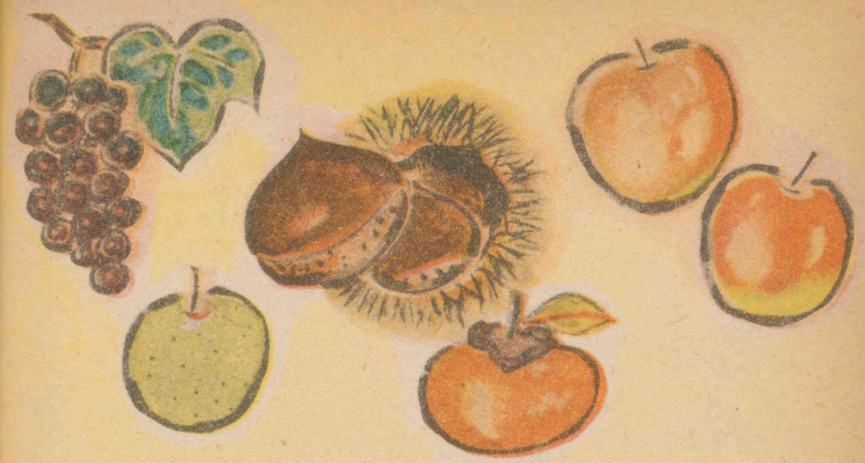
「ぶたの　はな　おおきいね。」
「はなが　おおきくて、めが　ちいさいね。」
「しっぽも　ちいさいよ。」
「ぶたの　しっぽ　おかしいね。」
「ぶたの　こどもが　いるよ。」
「ちょこ　ちょこ　あるいて　いるよ。」
「ぶたと　あひるが　なけば　ぶうがあ
ぶうがあだね。」
「こっちへ　きて　ごらん。」
「うしが　いる、うしが　いる。」

「うしの　つのは　こわいね。」
「めも　こわいよ。」
「ぼくを　みて　いるよ。」
「あ、とんぼが　つのに　とまった。」
「とんぼが　とまっても
しらないんだね。」
「つのだから　しら
ないんだね。」



「うまが　きたよ。
「こうまを　つれて　きたよ。
「こうまは　かわいいね。
「こうまが　しっぽを　ふって　いるよ。
「こうまは　かわいいね。

「みなさん　すわりましょう。
すわって、おべんとうを
たべましょう。
「おべんとう　たべるんだってよ。
「すわりましょう。
「みんな　おおきな　わに
なって　すわりましょう。
「わを　つくりましょう。
「おおきな　わを　つくって
すわりましょう。

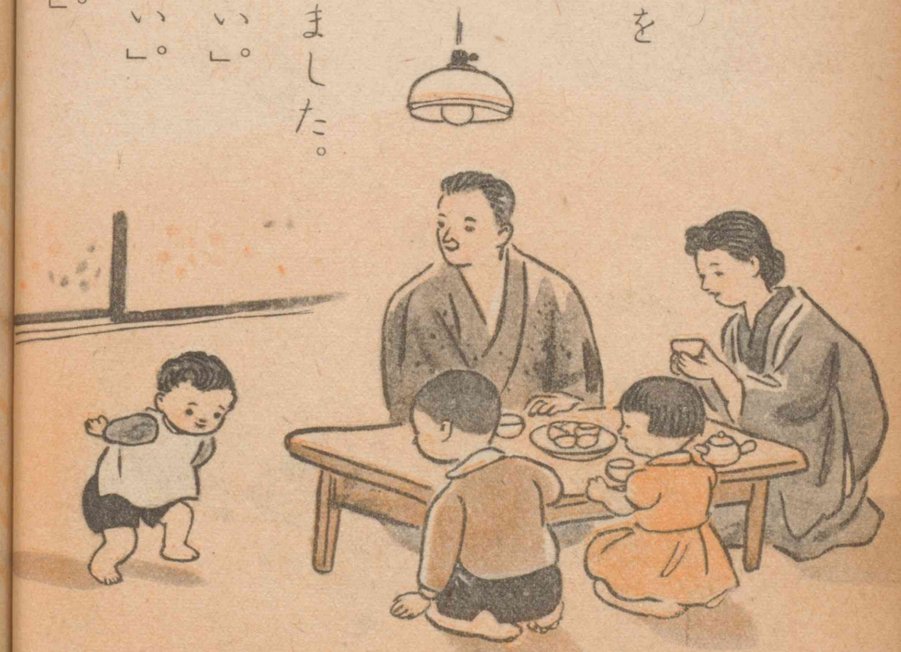


「わたくし　えんそくは　だいすきよ。」
「ぼくも　えんそくは　だいすきだ。」
「ぼくは　えんそくで　おべんとうを
たべるのが　すきなんだ。」
「わたくし　かきを　もって　きたわ。」
「わたくし　なしと　くりを　もって
きたのよ。」
「ぼくは　りんごを　もって　きたよ。
ぼくの　りんごは　おおきいよ。」

「みんなで　おもしろい　ことを
しましょう。」
「せんせい、ぼくは　あひるの
まねを　しますよ。」
「せんせい、ぼくは　あひると
ぶたと　うまと　うしの　なき
まねを　します。」
「かきが　なって　いる　まねは
できないかなあ。」
「できるよ　やって　みよう。」

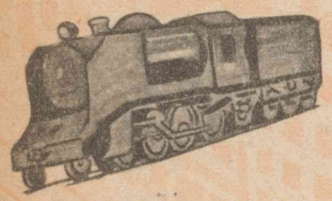
あきらさんは　えんそくの
おはなしを　しました。
ぼうやは　あひるの　まねを
しました。

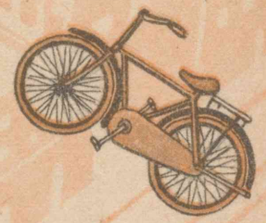
みんなは　はやく　やすみました。
「おとうさん　おやすみなさい。」
「おかあさん　おやすみなさい。」
「みなさん　おやすみなさい。」

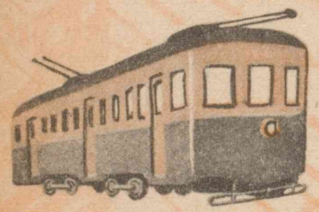


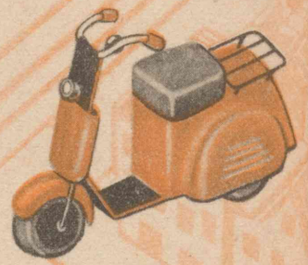
三　のりもの

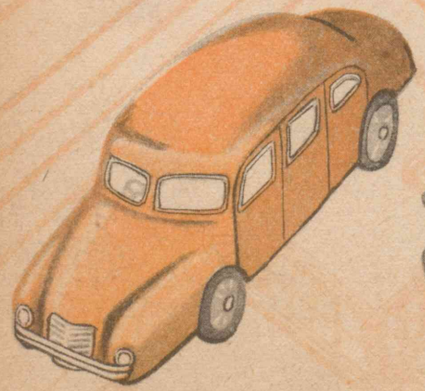
おおきな　まちへ
のりものごっこ

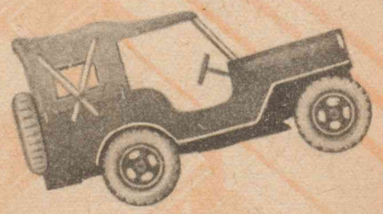






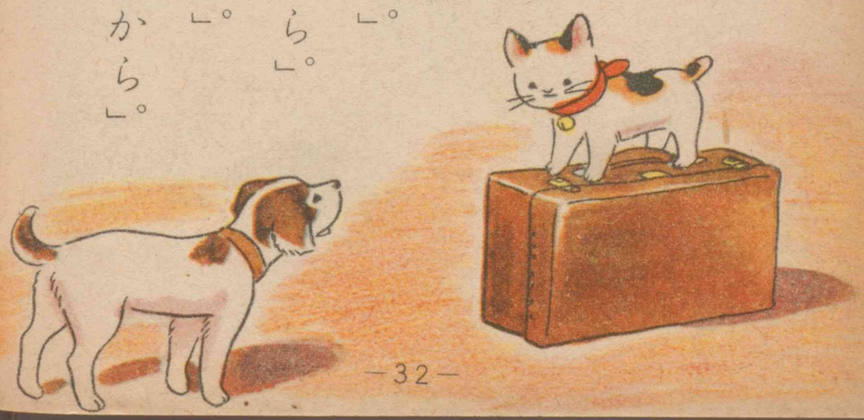






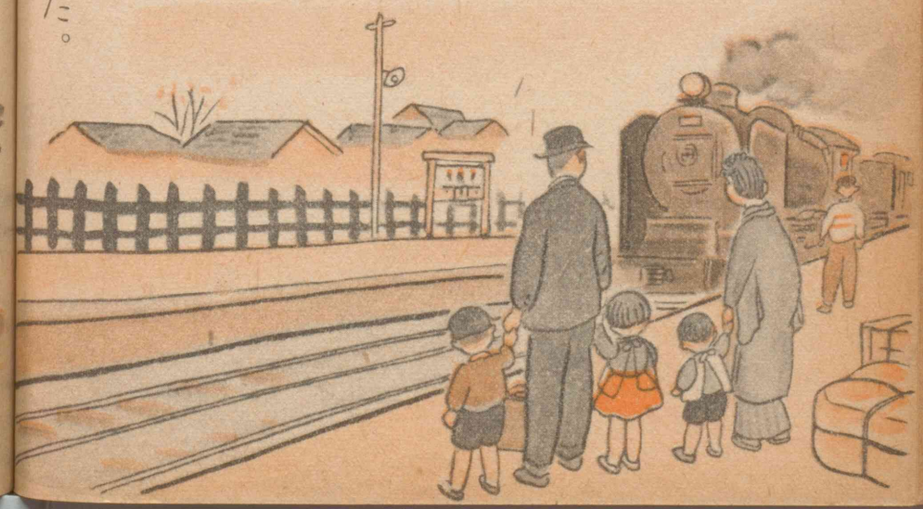
おおきな　まちへ

「しろ、さようなら。いって　くるよ。」
「みけ、さようなら。いって　くるよ。」
わん　わん
にゃお　にゃお
「おとうさん、しろも　いきたいんでしょう。」
「きょうは　だめだ。きしゃに　のるんだから。」
「おかあさん、みけも　いきたいんでしょう。」
「きょうは　だめよ。きしゃに　のるんですから。」
ていしゃばまで　あるいて　いきました。

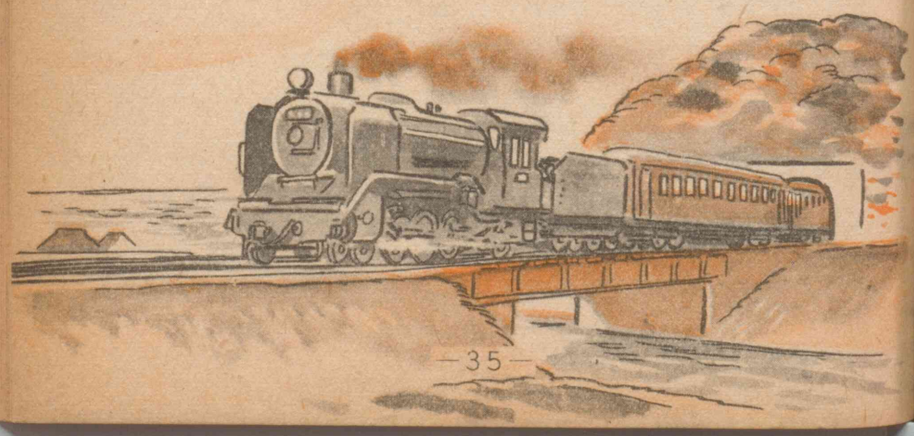


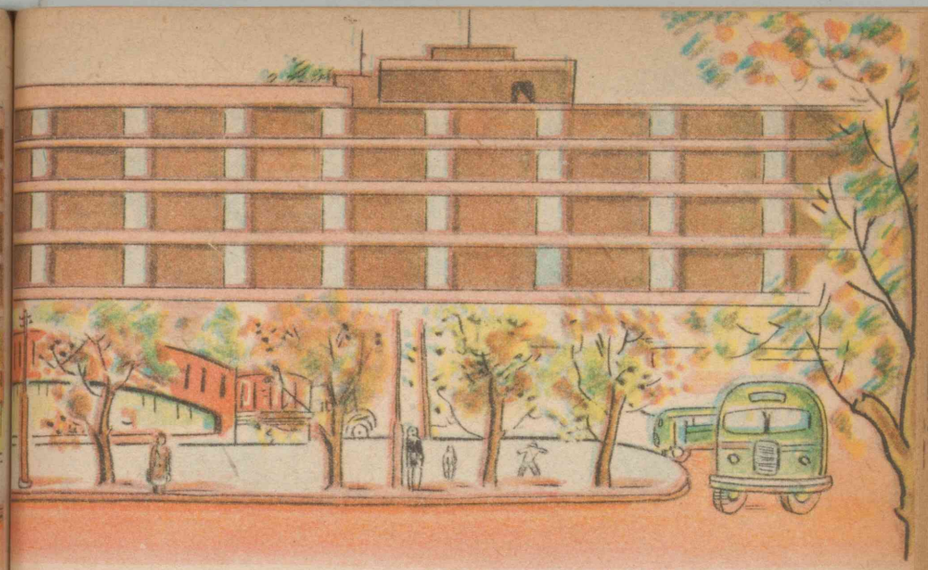
おとうさんが　きっぷを　かいました。
あきらさんと　ふみこさんのは
こどもの　きっぷです。
ぼうやの　きっぷは　ありません
ぼうやは　ちいさいから　きっぷは　いらない　のです。
ぼうやは、
「ぼくの　きっぷ。ぼくの　きっぷ。」
といいました。

きしゃが　はしって　きました。
ごうごうと　おとを　たてて　はしって　きました。
ぼうやは、
「きしゃぽっぽ、きしゃぽっぽ。」
と　いいました。
みんなは　きしゃに　のりました。
きしゃは、
「しゅっ　しゅっ　しゅっ　しゅっ。」
と、おとを　たてて　はしりだしました。

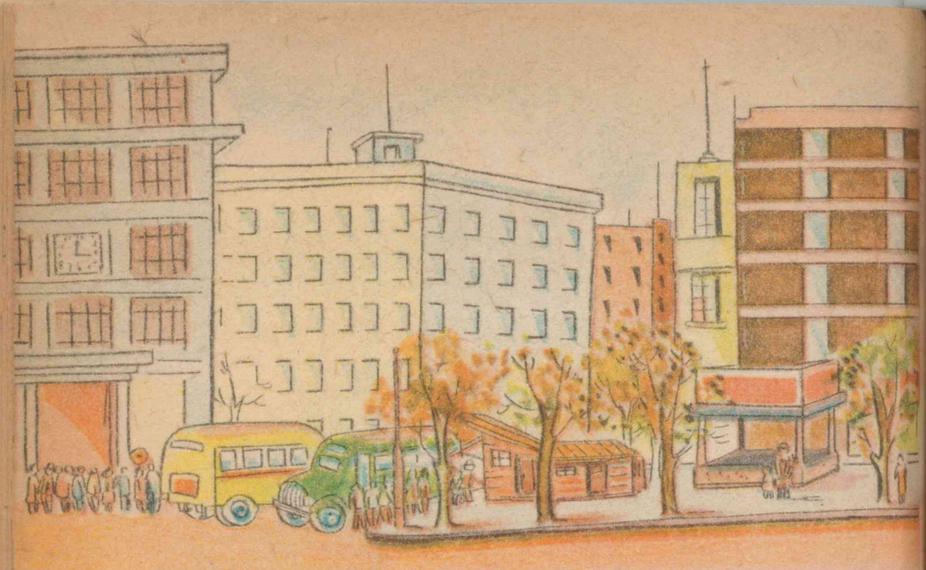


あきらさんたちの　きしゃは、とんねるを　でました。
あおい　うみが　みえます。
ふねが　うかんで　います。
しろい　ふねも　うかんで　います。
やまが　あかく　みえます。
きしゃは　てっきょうの　うえを　はしって　います。
ごうごうと　おとを　たてて　います。

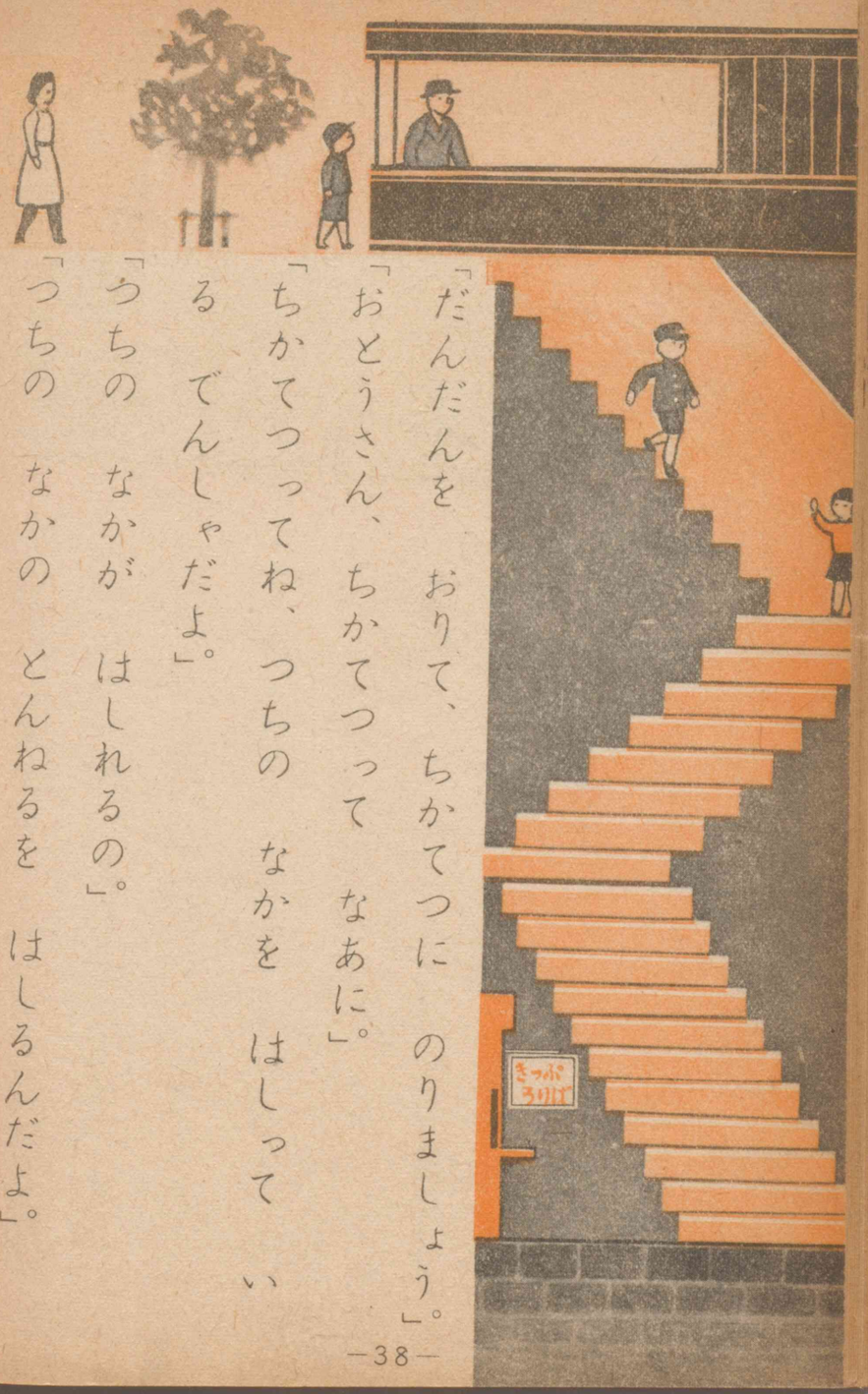




「おかあさん、たかい　うちばかりですね。」
「たかい　うちですね。」
「まどが　いっぱい　あるわね。」
「まどが　いっぱい　ありますね。」
「つみきの　うちみたいだね。」
「ぼく　あの　うえに　あがって　みたいなあ。」
「おとうさん、いっぱい　じどうしゃが　はしって　いますね。」

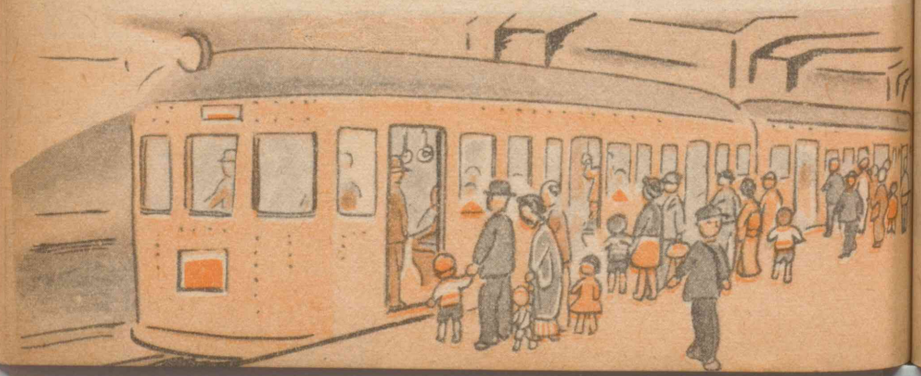


「あの、あかが　でたら　とまるんだ。あおが　でたら　あるくんだ。」
「おとうさん、あかが　でましたよ。でんしゃも　じどうしゃも　みんな　とまるんですね。」
「あれを　しんごうと　いうんだよ。」
「しんごうと　いうの。」
あきらさんは、
「しんごう、しんごう。」
と　いって　みました。



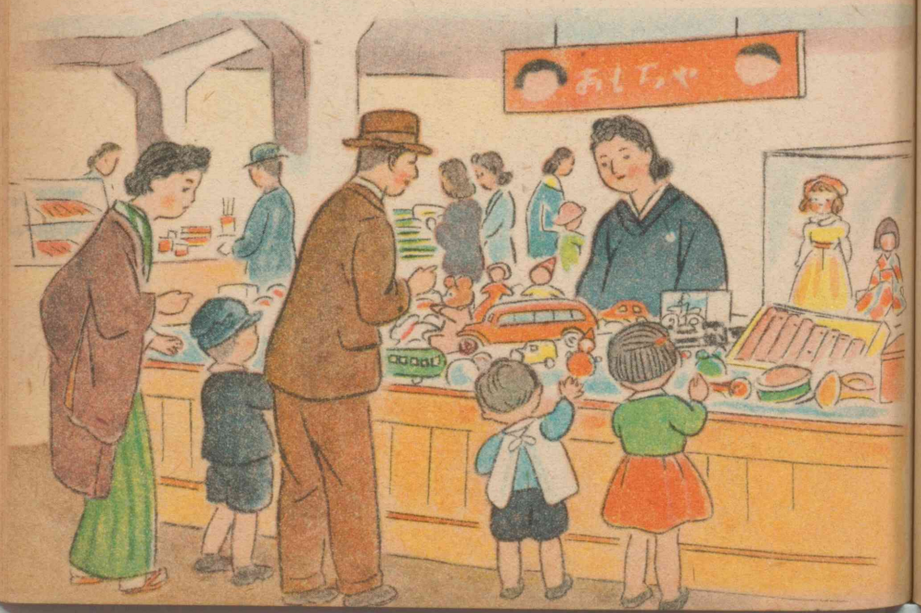
「だんだんを　おりて、ちかてつに　のりましょう。」
「おとうさん、ちかてつって　なあに。」
「ちかてつってね、つちの　なかを　はしって　いる　でんしゃだよ。」
「つちの　なかが　はしれるの。」
「つちの　なかの　とんねるを　はしるんだよ。」

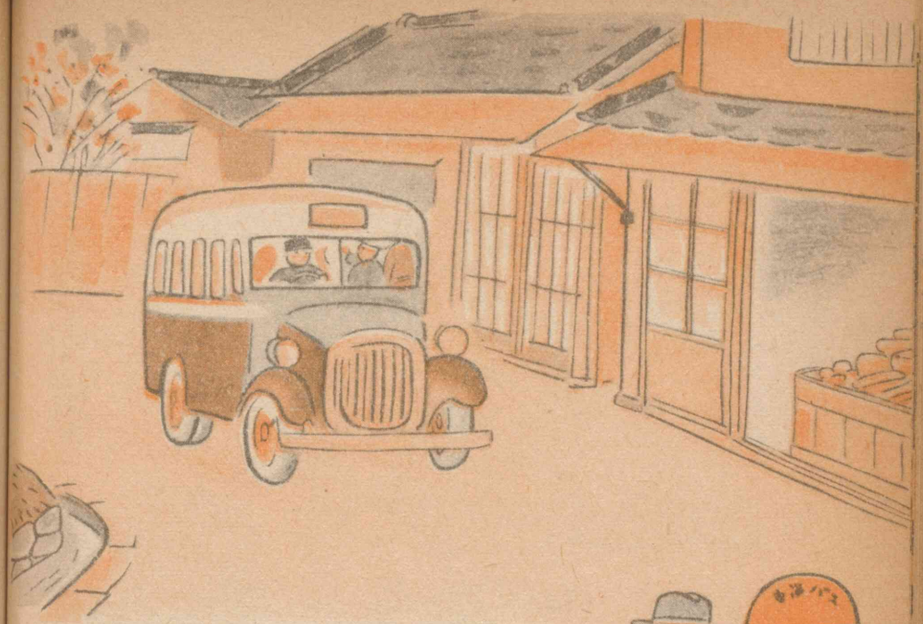
「おかあさん、あかるくて　きれいですね。」
「あかるくて　きれいでしょう。」
「つちの　なかみたいで　ないわね。」
でんしゃが　きました。
「のりおりは　おはやく　して　ください。」
と、おおきな　こえが　しました。
みんなが　のりました。
とは　ひとりでに　しまりました。
みんなの　のった　でんしゃは　はしり
だしました。



おおきな　おみせに　は
いりました。
いろいろの　ものを　う
って　います。
みんな　きれいに　なら
べて　あります。
ひとが　たくさん　はい
って　きます。
かって　いる　ひとも
あります。

「ぼうやは　なにが　ほしい。」
「ぼく　みんな　ほしいなあ。」
「みんなは　だめよ。もって
あるけないんですもの。じど
うしゃと　でんしゃを　かっ
て　あげましょう。」
ふみこさんには　かわいい
おにんぎょうを　かいました。
あきらさんには　つみきと
えほんを　かいました。

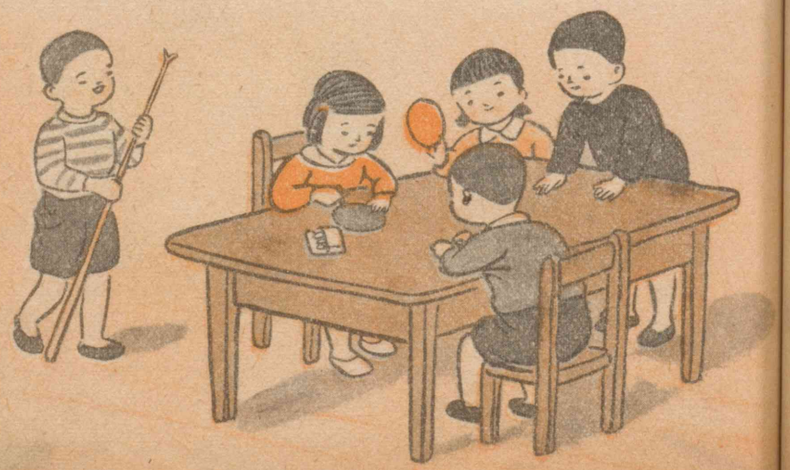




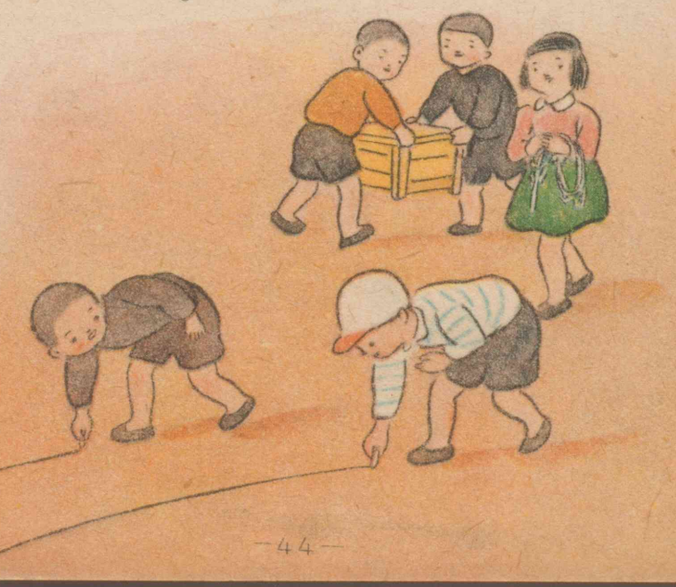
「ばすに　のって　おじさんの
うちへ　いきましょう。」
「おじさんと　おばさんが　まっ
て　いらっしゃるでしょうね。」
みんなは　ていりゅうじょで
ばすを　まちました。

のりものごっこ

あきらさんたちは　みんなで
のりものごっこを　する　ことに
しました。
すすむさんたちは　あか　あお
の　しんごうを　つくりました。
きぬこさんたちは　つなを　も
って　きました。



あきらさんたちは　おにわに
みちを　つくりました。
でんしゃが　とおる　みちを
つくりました。
ひとの　あるく　みちを　つ
くりました。
ていりゅうじょも　つくりました。
おまわりさんが　たつ　ところも
つくりました。
せんせいが　てつだって　くださいました。



でんしゃの　うんてんしゅ
を　きめました。
しゃしょうも　きめました。
おきゃくも　きめました。
まちを　あるく　ひとも
きめました。
しんごうを　もつ　ひとも
きめました。
あきらさんは　おまわりさ
んに　なりました。

のりものごっこが　はじまりました。
あか・あおの　しんごうが　でて　います。
はしって　いる　でんしゃも　あります。
とまって　いる　でんしゃも　あります。
のる　おきゃくも　あります。
おりる　おきゃくも　あります。
しゃしょうが　たって　います。
しゃしょうは　きっぷを　きって　います。
あきらさんは　ぴりぴりと　ふえを　ふい
て　います。

四　あきらさんの　おはなし

「みなさん、みんなで
おはなしを　しましょう。」
「せんせい、あきらさんの
おはなしを　ききましょう。」
「あきらさん、おはなしを
して　ごらん。」
「ぼく　しろの　おはなしを
しましょう。」
みんなは　ぱちぱちと　てを　たたきました。
せんせいも　ぱちぱちと　てを　たたきました。

みけが　ひなたぼっこを　して　いました。
「みけちゃん、ぼくらも　とおくへ　いこう
よ。きしゃに　のって、とおくへ　いこう
よ。」
と、しろが　いいました。
「しろちゃん、みて　ごらん。たかい　やま
に　ゆきが　ふりましたよ。ひくい　やま
にも　ゆきが　ふるでしょう。わたしは
いきません。」
と、みけは　いいました。

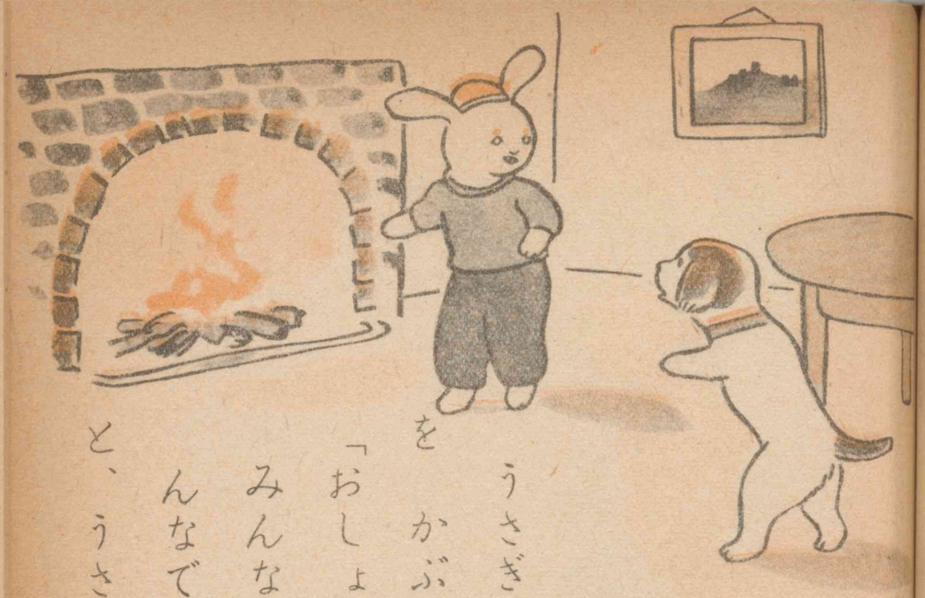
「ぼくは　ゆきが　すきだよ。
さむいのが　すきだよ。」
と、しろが　いいました。
「しろちゃんは　ゆきが　すきなの。
さむいのが　すきなの。
わたしは　ゆきが　きらいです。
さむいのも　きらいです。
わたし　いかないわ。」
と、みけが　いいました。
しろは　ひとりで　でかける　ことに　しました。

しろは　ひとりで　でかけました。かわが　ながれて
いました。はしの　うえに、おかあさんと　おんなの　こ
が　たって、したを　みて　いました。
しろも　はしの　うえに　たって、したを
みました。
その　とき、かぜが　おんなの　この　ぼ
うしを　ふきとばして　しまいました。
ぼうしは　かわに　おちました。
おんなの　この　ぼうしは　かわを
ながれて　いきました。

しろは　かわに　とびこみました。
じゃぶ　じゃぶ　およぎました。
しろは　ぼうしを　おいかけました。
ぼうしは　どんどん　ながれて　いきます。
しろは　どんどん　おいかけました。
しろは　ぼうしに　おいつきました。
しろは　ぼうしを　おんなの　こに　あげました。
おかあさんは「ありがとう。」と　いいました。
おんなの　こも「ありがとう。」と　いいました。

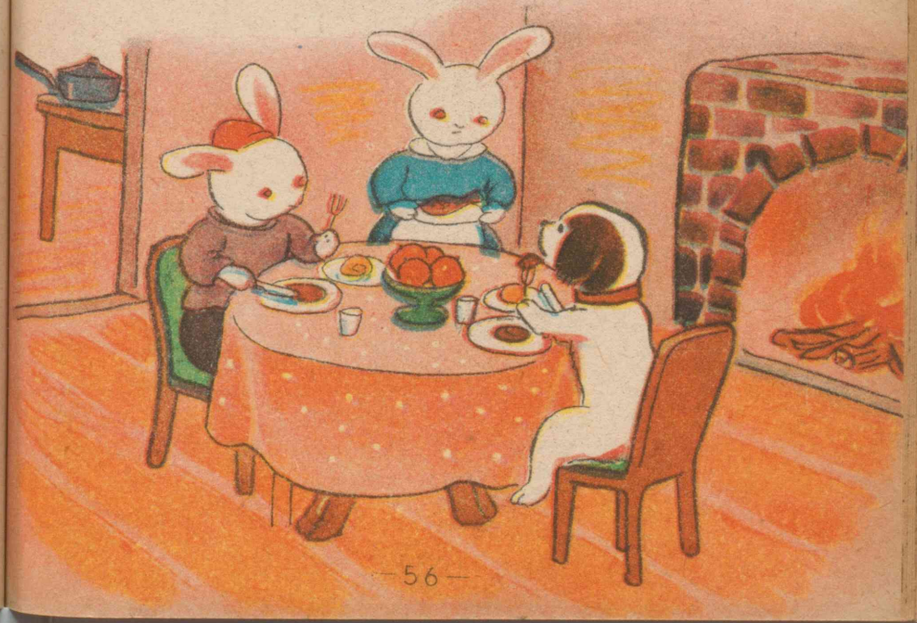
しろは　あるきました。
くらく　なって　きました。
のはらも　くらく　なって　きました。
やまも　くらく　なって　きました。
ゆきが　ふって　きました。
かぜも　ふいて　きました。
しろは　うちを　さがしました。
やまの　うえへ　いって　さがしました。
やまの　したへ　いって　さがしました。
どこにも　うちが　ありませんでした。

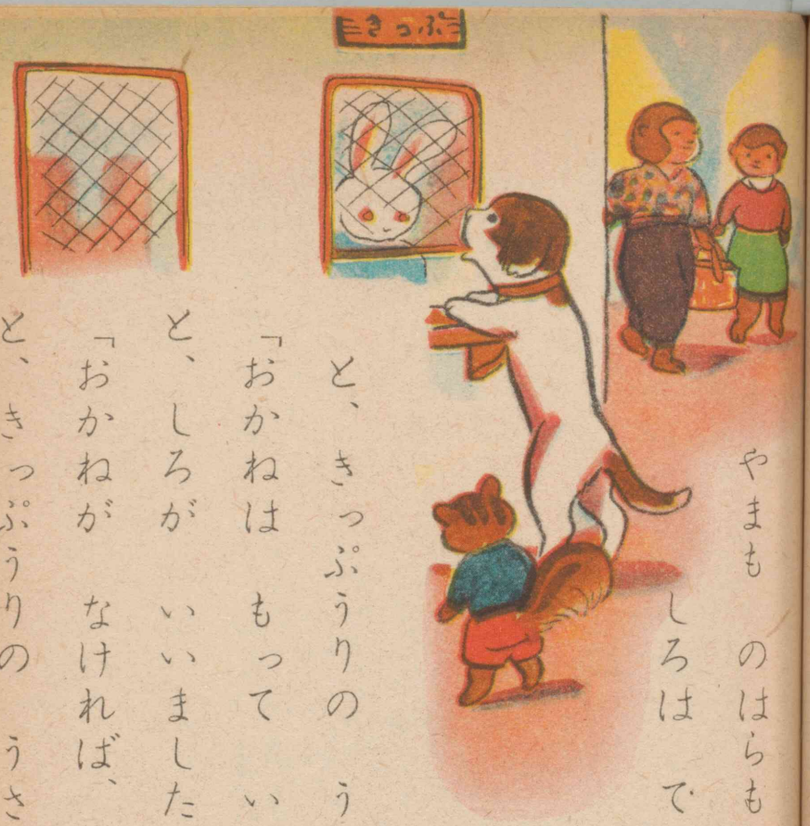
しろは　きの　したに　いきました。
かぜが　ぴゅう　ぴゅう　ふいて　いました。
ゆきが　どんどん　ふって　いました。
しろは「さむい、さむい。」と　いいました。
「しろちゃん、しろちゃん、
おはいり、なかに　おはいり。」
と　いう　こえが　きこえました。
「しろちゃん、はやく　おはいり。」
と　いう　こえが　きの　なかから　きこえました。



しろは　なかに　はいりました。
うさぎさんが　いました。
おへやの　なかは　あかるく
きれいでした。
うさぎさんも　あかい　きれいな　ぼうし
を　かぶって　いました。
「おしょうがつなのよ。おしょうがつには
みんなで　おへやを　きれいに　して、み
んなで　おもしろく　あそぶのよ。」
と、うさぎさんが　いいました。

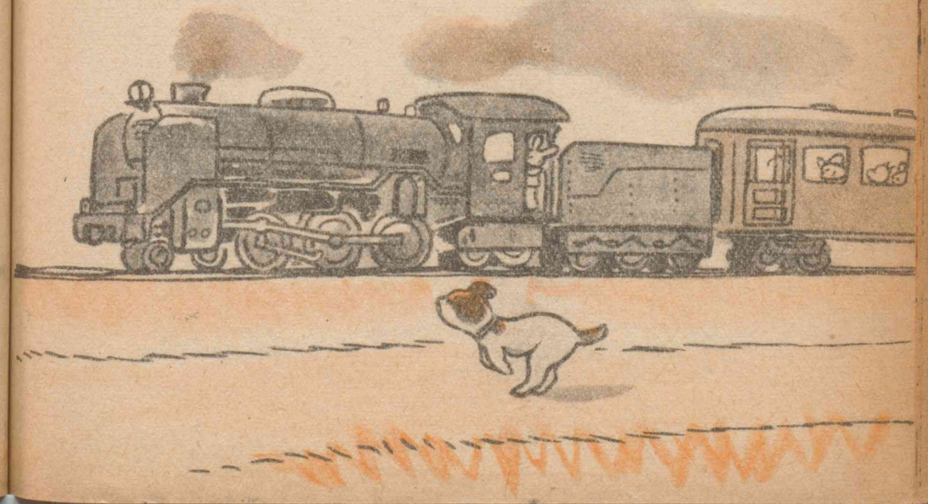
うさぎさんは　ごちそうを
だしました。
しろは　ごちそうを　たべ
ました。
いっぱい　ごちそうを　た
べました。
「しろちゃん、おやすみ。」
と、うさぎさんが　いいました。
「うさぎさん、おやすみなさい。」
と、しろも　いいました。





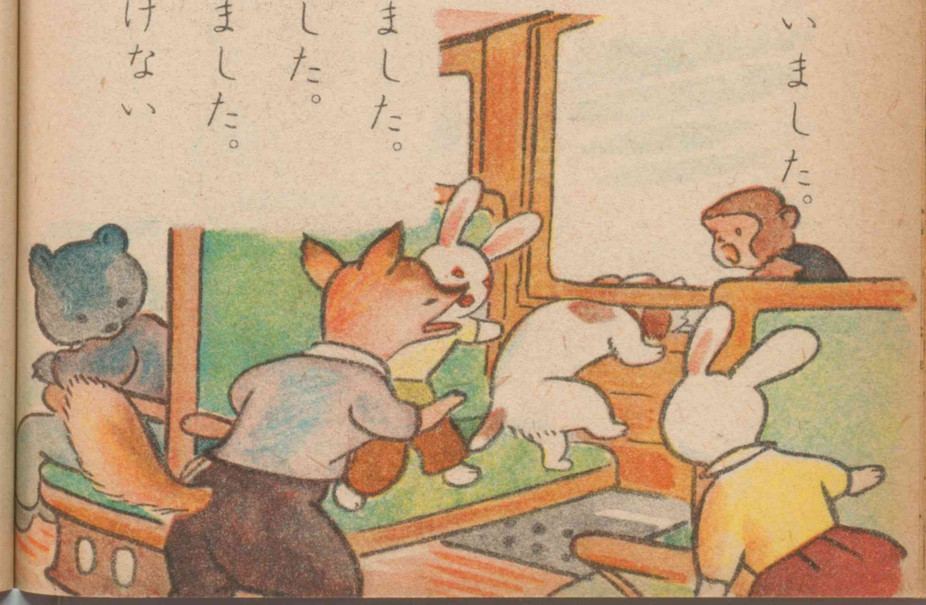
やまも　のはらも　あかるく　なりました。
しろは　でいしゃばに　つきました。
「きっぷを　ちょうだい。」
と　いいました。
「おかねを　だしなさい。」
と、きっぷうりの　うさぎさんが　いいました。
「おかねは　もって　いません。」
と、しろが　いいました。
「おかねが　なければ、きっぷは　うりません。」
と、きっぷうりの　うさぎさんが　いいました。

しろは　かんがえました。
「きしゃと　かけっこしよう。」
と、しろは　かんがえました。
「ぼうやも、あきらさんも、ぼく
より　おそい。」
と、しろは　かんがえました。
「きしゃも　ぼくより　おそいだろう。」
と、しろは　かんがえました。
きしゃは　はしりました。
しろも　はしりました。

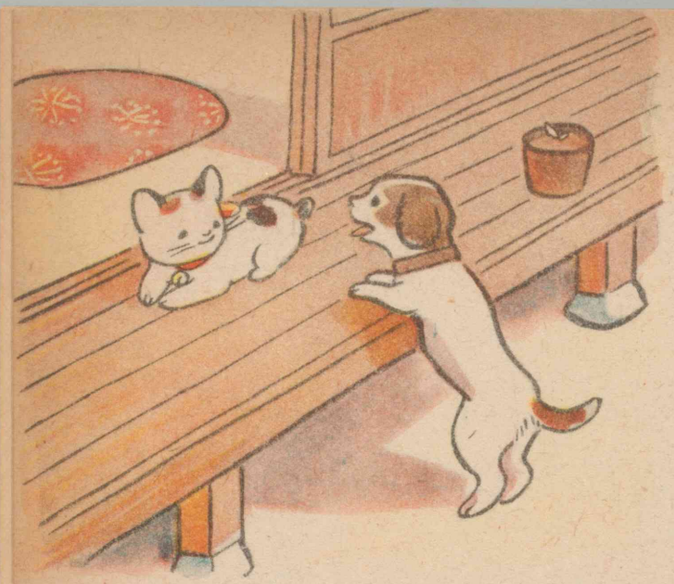


しろは　きしゃに　まけて　しまいました。
「きしゃは　はやいなあ。」
と、しろは　おもいました。
しろは　ていしゃばに　いきました。
しろは　おてつだいしようと　かんがえました。
しろは　かみくずを　ひろいました。
ごみも　ひろいました。
しろは　かみくずを　たくさん　ひろいました。
ごみも　たくさん　ひろいました。

しろは　きしゃに　のせて　もらいました。
まどから　がおを　だしました。
まどが　がたんと　おちました。
しろの　あたまに　おちました。
しろは　びっくりしました。びっくりして　あたまを　ぬこうと　しました。
しろの　あたまは　ぬけませんでした。
みんなが　まどを　あけて　くれました。
まどから　かおを　だしては　いけない
と　おもいました。



しろは　かえって　きました。
みけは　きょうも　ひなたぼっこを　して　いました。
「しろちゃん、おかえりなさい。どうだった。」
と、みけが　ききました。
「やまの　うさぎさんの　おうちは
おしょうがつだったよ。それから、
ぼくは　きしゃと　かけっこして
まけたよ。」
と、しろは　こたえました。
あたたかな　ひなたです。



あたらしく　でた　ことば

あんな……九
あかるい……一六
あひる……二三
あるく……二三
あげる……四一
ありがとう……五二
あける……六〇
あたたかな……六一

いう……五
いけません……八
いっしょ……一八
いる……二三
いる……三三
うさぎ……三
うち（お）……八
うた……一四
うたう……一四
うし……二四
うま……二六
うかぶ……三五
うる……四〇
うんてんしゅ……四五

えんそく……一七

おとす……二〇
おさえる……二〇
およぐ……二三
おと……三四
おりる……三八
おじさん……四二
おばさん……四二
おまわりさん……四四
おんな（のこ）……五一
おいつく……五二
おそい……五八
おもう……五九
かわ……一三
かう……一八
がっこう……二二
かわいい……二六
かき……二八
かね（お）……五七
かんがえる……五八
かけっこ……五八
かみくず……五九

きりぬく……六
きんじょ……八
きょう……三二
きっぷ……三三
きめる……四五
きゃく（お）……四五
きる……四六
きらい……五〇

くれよん……六
くださる……七
くらく……一四
くだもの……一八
くり……二八

こと……六
こども……八
こまる……一〇
ころがる……二〇
こわい……二五
こえ……三九
ごちそう……五六
ごみ……五九

さむい……五〇
さがす……五三

しばい（お）……三
しまう……一〇
しっぽ……二四
しる……二五
じどうしゃ……三六
しんごう……三七
しまる……三九
しゃしょう……四五
しょうがつ（お）……五五
すずしい……五
すき……一九
すわる……二七
その……一五
たすけ……一六
だめ……三二
たてる……三四
たかい……三六
たくさん……四〇

たつ……四四
たたく……四八
だす……五六

ちょうだい……一九
ちかく……二二
ちかてつ……三八

つき……一六
つく……二三
つの……二五
つれる……二六
つみき……三六
つち……三八
つな……四三
つく……五七

ていしゃば……三二
てっきょう……三五
でんしゃ……三七
ていりゅうじょ……四二
でかける……五〇

とら……六
とおく……八
とんぼ……九

とき……一五
とうとう……二一
とまる……二五
と……三九
ところ……四四
とびこむ……五二
どこ……五三
どう……六一

なく……一四
ならべる……一八
なあに……二二
なし……二八
ながれる……五一
ない……五七

にんぎょう……六
にげる……一一

ぬく……六

のはら……九
のりもの……三一
のる……三二

はさみ……七

はし……一三
はな……二四
ばす……四二
はじまる（はじめる）……四六

ひろい……九
びっくり……一一
ひとりでに……三九
ひと……四〇
ひなたぼっこ……四九
ひくい……四九
ひろう……五九

ぶた……二四
ふる……二六
ふね……三五
ふえ……四六
ふる……四九

べんとう（お）……二七

ほしい……四一

まいご……一五
また……二〇
まつ……二一

まち……二二
まね……二九
まど……三六
まける……五九

みせ（お）……四〇
みち……四四

むし……一四
むら……二二
むかえる……一六
め……一一

もっと……一一
もつ……四五

やすむ……三〇
ゆき……四九

らじお……一五

りんご……一九

わたる……一三
わ……二七

教師ならびに父兄のかたがたへ

この本は、小学校一年生の国語の教科書の第二巻として編修しました。

第一巻をプレプリマー（入門予備）として、自然のさけび声を中心としたのをうけて、第二巻のこの本は、プリマー（入門）として文章に入門するいとぐちをつくりました。

題材は、「あきら」さんの友だちを中心として、日常の遊びや、学校生活や、校外遠足や、お話会にまで広げました。

全巻の方針としては、明朗、快活な子どもの生活をとること、中でもわらいをもったものを、ということに努力しています。

したがって、この本を手がかりに、子どもの自身の生活を十分に発表させ、自然に発表することばを取りあげて導くなどして、言語発表になれさせるように努力したいと思います。

Copyright 1950, by
The Kyōiku Tosho Kenkyukai

All rights reserved
The text of this publication or any part thereof may not be reproduced in any manner whatsoever without permission in writing from the authors.

小国 106

一ねんせいの　こくご　中

Approved by Ministry of Education
(Date Jun. 25, 1949)

編者
東京都文京区大塚窪町
東京高等師範学校附属小学校内
財団法人 教育図書研究会
理事長 東京高等師範学校教授 佐藤保太郎
担当執筆者 東京高等師範学校教諭 田中豊太郎
〃 花田哲幸
〃 青木幹勇
〃 森下巌
〃 小島忠治

表紙 さしえ 田原輝夫 大槻定雄

印刷 昭和二十五年五月 日
発行 昭和二十五年五月 日 定価 円

著作者 財団法人 教育図書研究会
会長 務台理作
発行者 学校図書株式会社
代表者 川口芳太郎
東京都港区芝三田豊岡町八番地
印刷者 図書印刷株式会社
代表者 川口芳太郎
東京都港区芝三田豊岡町八番地
発行所 学校図書株式会社
東京都港区芝三田豊岡町八番地

本書の指導書・ワークブック・註釈書並びにこれに類する一切のものの無断発行を禁ずる。

広島大学図書
0130449764